

2022年11月27日 午前礼拝
「イエス様の祈り」 説教者:堺希望伝道師

【引用聖句】

マタイ 26:36~46

36. それからイエスは弟子たちといっしょにゲツセマネという所に来て、彼らに言われた。「わたしがあそこに行って祈っている間、ここにすわっていなさい。」
37. それから、ペテロとゼバダイの子ふたりとをいっしょに連れて行かれたが、イエスは悲しみもだえ始められた。
38. そのとき、イエスは彼らに言われた。「わたしは悲しみのあまり死ぬほどです。ここを離れないで、わたしといっしょに目をさましていなさい。」
39. それから、イエスは少し進んで行って、ひれ伏して祈って言われた。「わが父よ。できますならば、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願うようにではなく、あなたのみこころのように、なさってください。」
40. それから、イエスは弟子たちのところに戻って来て、彼らの眠っているのを見つけ、ペテロに言われた。「あなたがたは、そんなに一時間でも、わたしといっしょに目をさましていることができなかつたのか。」
41. 誘惑に陥らないように、目をさまして、祈っていなさい。心は燃えていても、肉体は弱いのです。」
42. イエスは二度目に離れて行き、祈って言われた。「わが父よ。どうしても飲まずには済まされぬ杯でしたら、どうぞみこころのとおりをなさってください。」
43. イエスが戻って来て、ご覧になると、彼らはまたも眠っていた。目をあけていることができなかつたのである。
44. イエスは、またも彼らを置いて行かれ、もう一度同じことをくり返して三度目の祈りをされた。
45. それから、イエスは弟子たちのところに来て言われた。「まだ眠って休んでいるのですか。見なさい。時が来ました。人の子は罪人たちの手に渡されるのです。」
46. 立ちなさい。さあ、行くのです。見なさい。わたしを裏切る者が近づきました。」

【説教要約】

イエス・キリストの生涯の最後、十字架に至る苦難がここから始まる。
最後の晩餐を終えてから、イエス様は3年間共にしてきた弟子たちに預言をされる。

マタイ 26:31,32

31. そのとき、イエスは弟子たちに言われた。「あなたがたはみな、今夜、わたしのゆえにつまずきます。『わたしが羊飼いを打つ。すると、羊の群れは散り散りになる』と書いてあるからです。
32. しかしわたしは、よみがえってから、あなたがたより先に、ガリラヤへ行きます。」

イエス様はこれから何が起こるのかをすべて知っていた。すなわち、羊飼いである自分が神によって打たれて死ぬ。それは人の目には民の指導者や国民のねたみによって殺されて敗北したように見えるが、実は神の主権のもとにあるのである、と。

しかし弟子たちはそれにつまずいて散っていく。それはキリストの勝利ではなく敗北に見える、同時に自分たちの危険や没落にもつながるからである。皆、そうやってつまずく。

しかし、キリストが見ておられたのはその後、「先にガリラヤへ行」くということであった。これからひどくつまずく弟子たちを、その先で待っているということである。

一方そんなキリストの思いを知る由もない弟子たちは、自分たちが無力にもイエス様の仰られたとおりになることも、それらが神の主権のもとで行われることも理解できずに息巻く。「自分はずまずかない」と。

①

マタイ 26:36~39

36. それからイエスは弟子たちといっしょにゲツセマネという所に来て、彼らに言われた。「わたしがあそこに行って祈っている間、ここにすわっていなさい。」
37. それから、ペテロとゼベダイの子ふたりとをいっしょに連れて行かれたが、イエスは悲しみもだえ始められた。
38. そのとき、イエスは彼らに言われた。「わたしは悲しみのあまり死ぬほどです。ここを離れないで、わたしといっしょに目をさましていなさい。」
39. それから、イエスは少し進んで行って、ひれ伏して祈って言われた。「わが父よ。できますならば、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願うようにはではなく、あなたのみこころのように、なさってください。」

ゲツセマネに着いてから、イエス様は弟子たちを、最後まで同じ場所へ連れて行ってくださった。特に、後に初代教会の柱となるペテロ、ヨハネ、ヤコブは近くに連れていかれた。

そこでイエス様は「悲しみもだえ始められた」と書かれている。その悲しみは、杯を飲むことであった。それはイエス様にこれから待っている使命であった。

マタイ 27:46

三時ごろ、イエスは大声で、「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」と叫ばれた。これは、「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。

十字架にかかることの意味には、父なる神に捨てられることが含まれていた。杯は、旧約聖書のエレミヤ書や詩篇で、神の裁きを受けて滅び去ることを意味する。神の敵として扱われ、一切の恵みを取り去られ、よみに下ることであった。

すべての人が受けるべきその裁きを、最も神と親しく愛し合い、最も純粋な交わりを持っていた神の子が十字架の上で受けるということであった。

イエス様はこう祈る。「わが父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください」と願う。

最も悲しむべき、最も受け入れがたい杯であった。常に父のみこころと心を共にしていたキリストが垣間見せた、この「過ぎ去らせてください」ということばの重みは、正直に申し上げて、理解しきることができない。そのスケールを表現することは私にはできない。

しかしイエス様は、祈りの最後に「あなたが望まれるままに、なさってください」と申し上げるのだった。自分の思いが神の御思いに沿っていなかったとしても、従うことに激しい苦痛を伴うとしても、神のみこころが優先されるように、ということだ。

祈りによる勝利とは、自分の願いをストレートに叶えていただくことではない。粘りに粘って神の首を縦に振らせることではない。

正直な気持ちを神の前に打ち明けて、その通りになることを願いながら、それでもなお「神のみこころが成るように」とみこころを優先することである。祈ってその通りにしていただけることも確かにある。だが、祈り抜いた末にまったく別の道に導かれて、それでも神のみこころと従っていく祈りこそ、より大きな勝利ではないだろうか。

②

マタイ 26:40,41

40. それから、イエスは弟子たちのところに戻って来て、彼らの眠っているのを見つけ、ペテロに言われた。「あなたがたは、そんなに、一時間でも、わたしといっしょに目をさましていることができなかったのか。」

41. 誘惑に陥らないように、目をさまして、祈っていなさい。心は燃えていても、肉体は弱いのです。」

一方、弟子たちは、苦しみの中にいるイエス様に対して、同じ思いに至って祈っていることはできなかった。彼らに対して、イエス様は、「霊は燃えていても肉は弱い」と彼らの真実を告げた。

イエス様の側に死んでもついて行ってやろうと誰もが息巻いていたが、父に捨てられるというキリストの重荷を理解することも、共に背負うことも、誰にもできなかったのである。

もし、キリストと同じように自分が今日死ぬと思っていたら、彼らは眠りなどしなかったであろう。

もし、そんなキリストの心についていきたいと思っていたなら、「自分だけはついていく」などと、人と比べている余裕はなかつたろう。

キリストが三人を連れていかれたのは、彼らがキリストの御思いを最も理解していたからでも、最も役に立つからでもなかつた。

イエス様と共にいればいるほど、彼らが知ることができたのは、この重荷がイエス様ただひとりにはしか背負うことができなかつたこと、自分たちはそこで何の役にも立つことができなかつたということだけだつた。重荷は共有するどころか、むしろキリストの背中にはしか乗っていなかつた。

この後、祈りを終えられたイエス様を祭司長たちから派遣された人々が逮捕しようとやってくる時、弟子たちは恐怖のあまり逃げ出すことしかできなかつた。

彼らが自分自身について悟ることができたのは、ただ自分自身の弱さと、不甲斐なさだけであつた。共に居ればいるほど、キリストの背負われているものとの差、信仰の差は開くばかりであつた。

しかし、あらかじめこの弟子たちのみつともなさや弱さ、不信仰すらイエス様はご存知であつた。ゲッセマネに来られる前に、イエス様は、このみつともなく、弱い弟子たちを待っていると、あらかじめ告げられていたのだ。

三人が後に、初代教会の要になるのは、この一連の経験をしたからである。つまり、キリストの思い、信仰、聖さに、自分はまったく近くないこと。ついていくどころか、主を見捨てて逃げてしまうような弱さ。嫌と言う程わかる役に立たない自分の姿。しかし、そのような自分を決して捨てなかつたキリストの愛。それを彼らは知つたから、神のお働きを委ねられる者とされたのである。

これは、私たちも同じではないだろうか。キリストが負われたことの重みを私たちは誰一人理解しきることはできないし、それを少しでも代わりに負うこともできない。また、そうする必要もない。それはキリストにしか負うことはできなかつたのである。

父から捨てられること、自分や他人の罪を背負って責めを受ける事。それはもうキリストがしてくださつたということである。私たちの現実もまた、弟子たちと同じ「霊は燃えていても肉は弱い」のではないだろうか。イエス様について行く、ついていけると言つて、眠つてしまつているような弱い存在ではないか。

少なくとも私はそうだ。それを知っているのに、「私は大丈夫。イエス様についていける」と自分の力で歩もうとしてしまう。その時には極端に祈りが少なくなる。「弱い」はずなのに、神の助けを必要としない時がある。その時私は、眠ってしまった弟子たちのように、実はイエス様の心とは遠いところにいるのだろう。

しかし、イエス様はとて神の役に立つことなどできない私たち、神に頼ることを忘れてしまうような者の不甲斐なさを誰よりもご存知である。それを理解されたうえで、ご自身の元に私たちが来ることを待っていてくださるのだ。

だから私たちがすべきことは、このキリストのところに、何回でも立ち返ることである。私たちが受けるべき永遠の裁きは、もはやない。キリストがその裁きを、すべて受けて下さったのである。神は既にこのことをみこころとして成して下さった。そして、この苦しみを通られたキリストの心、キリストの御霊が信じた者と一生ともに居て下さるのである。

これ以上の慰めがあるだろうか。だから私たちは、諦めずに、何度でもキリストのもとに帰ろうではないか。

③

マタイ 26:42~44

42. マタイ 26:42, イエスは二度目に離れて行き、祈って言われた。「わが父よ。どうしても飲まずには済まされぬ杯でしたら、どうぞみこころのとおりをなさってください。」

43. マタイ 26:43, イエスが戻って来て、ご覧になると、彼らはまたも眠っていた。目をあけていることができなかったのである。

44. マタイ 26:44, イエスは、またも彼らを置いて行かれ、もう一度同じことをくり返して三度目の祈りをされた。

二度目の祈りの時、イエス様の祈りは変化した。そして三度目もそれは揺るがず、変わることがなかった。前の39節では、「できることなら」とある。事実、神には杯を飲ませない選択をされるお力はあっただろう。イエス様を苦しみに遭わせず、十字架につけず、むごたらしく捨て去ることをしないこともできた。

しかし、それはみこころではなかった。神のみこころは、苦しみを通り、一度父に捨てられ、死んでよみに下ったキリストをよみがえらせ、この苦しみを通られたキリストを通して神の栄光が現されることであった。

イエス様は、父のみこころを確信し、「わたしが飲まなければこの杯が過ぎ去らないのであれば、あなたのみこころがなりますように」と神のみこころに心を定め、使命に向き合われたのである。

神のみこころを求める者の祈りに、神様はみこころを示すことによって応えてくださるということである。そして、みこころがわからず、恐れや不安の中にある心を、みこころに導いて下さり、勇気と平安を与えて下さるのである。

たとえそれが自分の願い通りであっても、願い通りでなかったとしても、神の平安はその人の心に本当の満足を与えて下さる。この方にできない事は何一つなく、この方の私たちに立ておられるご計画は、幸いと慰めに満ちているからである。

人の幸福は、必ずしも自分の願った通りになることだとは限らないということである。人には今予測できることしか知ることはできず、また自分にとって得となる事ばかりに目が留まる。しかし、神はその先を見ておられる。

私たちにとって幸いなのは、神が必ず良いことを成して下さることを信じ、みこころに進んだ結果、神にしか成すことのできない御業を成して下さることを見る事ではないか。それはますます神との関係を深め、どんな状況でも神がともにいて下さるといふ更なる信頼へと繋がっていく。

しかし、委ねる事、見えないことを信じるには信仰が必要である。委ねることは、恐れを伴う。それは他人が代わりに背負うことはできないのだ。しかし、安心してほしい。あなたは一人でそれに立ち向かうわけではない。ゲッセマネを通られたイエスの霊、神の御霊がいつもあなたと共にいて、その心を理解してくださるからだ。

④

マタイ 26:45,46

45. それから、イエスは弟子たちのところに来て言われた。「まだ眠って休んでいるのですか。見なさい。時が来ました。人の子は罪人たちの手に渡されるのです。

46. 立ちなさい。さあ、行くのです。見なさい。わたしを裏切る者が近づきました。」

そして、いよいよ杯を飲む時がやってくる。それは、弟子たちに逃げられ、民の指導者と国民に妬みから偽りの裁判にかけられ、呪われた者となって十字架にかかり、父に捨てられることである。しかし、そのすべてで、イエス様は怖がることなく、従われていくのだ。なぜなら、その先に、必ず父が死から救い出してくださるからである。